

持続力の向上を支援するアプリケーションの開発

†山内秀行

†茨城工業高等専門学校
情報・電気電子工学専攻

‡小飼敬

‡茨城工業高等専門学校
電子情報工学科

‡杉村康

‡茨城工業高等専門学校
電子情報工学科

1. はじめに

1 つの物事をずっと続けていくことは大変であり、続けていった結果に幸福な思いが出来ても、その過程が辛く、苦しいものであれば、途中で挫折してしまう人が多いだろう。

近年の健康への意識の高まりやタバコ税の増税で実行する人が増えている「禁煙」や、昔から様々な方法が研究されている「ダイエット」、最近の学力低下問題で不足しているといわれる「勉強」など、続けていかないと効果が期待できなく、途中で挫折してしまう人が多いものを挙げるときりが無い。

では何故、途中で挫折してしまうのだろうか。その主な理由は、「成果が見えにくい」、「面倒くさい」といったことだろうと考えられる。

そこで本研究では、上記に述べたような挫折してしまう場合が多い事柄に関して、グラフなどの機能で成果を確認しながら、自分の設定した目標が達成できるように支援するアプリケーションを開発する。

2. アプリケーションの開発

2.1 概要

上記の内容に基づいた、アプリケーションの概要は以下のとおりである。

1. 週単位、月単位、年単位で目標が設定できる。

2. グラフで自分の成果や目標が確認できる。
3. デスクトップにカレンダーを常駐させ、様々な情報の入力や目標確認、グラフを見る等の操作が手早く容易にできるようにする。

2.1 開発

上記の概要を元に開発したアプリケーションのグラフの表示例と、デスクトップに常駐させたカレンダーを図1、図2に示す。

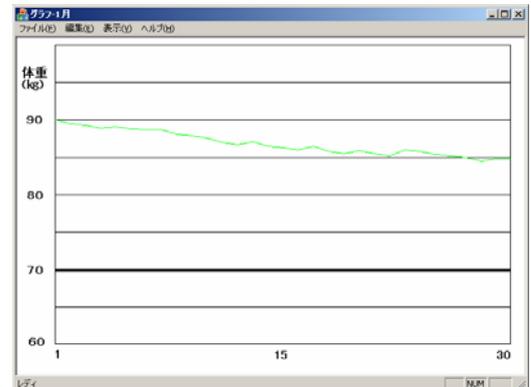


図1 グラフの表示例

Fig.1 The indication example of the graph

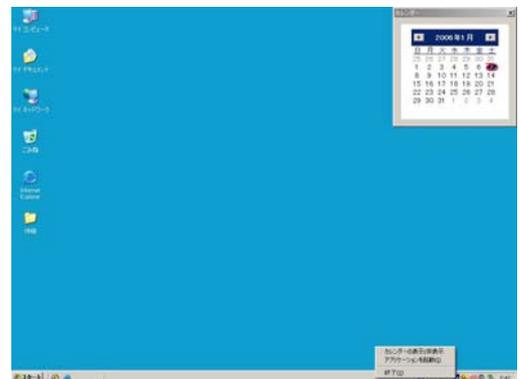


図2 カレンダー

Fig.2 The calendar made resident

The development of the application to support of the effort progress
 † Hdeyuki Yamauchi ‡ Kei Kogai ‡ Yasushi Sugimura
 † Advanced Course of Computer, Electrical and Electronic Engineering,
 Ibaraki National College of Technology
 ‡ Electronic and Computer Engineering,
 Ibaraki National College of Technology

図1のグラフでは、ダイエットを例として、横軸は日時を縦軸は体重を表しており、グラフ中の太線は年間の目標を示している。

例では、横軸を1ヶ月としているが、週単位や数ヶ月単位、1年で表示することも可能である。また、年間の目標だけでなく、週単位や月単位の目標も表示可能である。

図2のカレンダーでは、カレンダー内の日付をクリックすることで、さまざまな情報の入力が可能である。また、タスクバーのアイコンからカレンダーの表示・非表示を切り替えることが出来、グラフを見るなどの操作を行うことが出来る。

3. アプリケーションの検証

本アプリケーションを検証するに当たって重要視する事柄は、操作が容易なことと、自分の成果や状態がわかるということである。

情報を入力する等の操作が容易でなければ、本アプリケーションを利用するユーザは面倒くさいと思っ、続けていくことを諦めてしまう可能性があり、また、自分の成果や状態が確認できないと同じく続けていくことを諦めてしまう可能性が出てくるためである。

以上のことを踏まえて、本アプリケーションの検証を行うと、情報を入力する等の操作がデスクトップに常駐させたカレンダーから容易でき、グラフで自分の成果を確認することが可能である。また、今の時点でグラフは折れ線グラフでしか表示することが出来ないが、今後の開発で他の種類のグラフでも表示可能にする予定である。

4. 課題・発展

4.1 課題

今後の課題として、まず挙げられるのが、折れ線グラフ以外の種類でのグラフで表示可能にすることである。他の種類のグラフで表示可能にすることで、適用分野が広がるなどの効果が得られると考えられる。

次にあげられるのが、選択した、続けていく事柄に関して、一般的な基準により現在の状態がわかるようにすることである。この機能は、例えば禁煙を選択したとき、1日の喫煙本数や喫煙年数から、どの病気にどのくらいなりやすいかわかるようにするものである。この機能の表示もグラフで行うことを考えている。

4.2 発展

本アプリケーションの発展研究として以下のものが考えられる。

1. プラグイン形式で続けていく事柄の項目を増やせるようにする。
2. 自分と同じ努力を続けている人とコミュニケーションがとれることで、やる気の向上を図る。

5. まとめ

今回開発したアプリケーションは、情報を入力する等の操作がさせたカレンダーから容易できるためユーザに面倒くさいという思いをさせることが無く、グラフで自分の成果を確認することでやる気を持続させることが可能である。

今後の開発では、実際の使用による検証を行うことで、本アプリケーションを更によりよいものに、努力し続けていく人を支援していきたい。

<参考文献>

- [1] 岩田宗之：“Visual C++.NET 逆引き大全 500の極意”
株式会社 秀和システム(2005)
- [2] 常岡伸二：“スタンダード Visual C++”
技術評論社 (2004)
- [3] WILL
<http://www31.ocn.ne.jp/~yoshio2/toppage-1.html>